

日本における中国画題綜覧 (九)

A Compendium of Chinese Painting Themes in Japan (9)

き行 (三)

きりき 綺李奇 (綺里季)

綺李奇は綺里季の間違いである。綺里季は四皓の一人である。↓
四皓

【作例】

「綺李奇」(滝澤清畫『潜龍畫譜』人物之部、明治一五年 [1882] 刊本)

桐に鳳凰

↓「鳳凰」

【作例】

「桐に鳳凰」(滝澤清畫『潜龍畫譜』花鳥之部、明治一二年 [1879] 刊本)

「桐に鳳凰」(橋有税「橋氏宗兵衛」『繪本寫寶袋』卷八、享保五年 [1720] 刊本)

きりん 麒麟

麒麟は「仁」の獣で、三百六十種類の動物の長である。牝は麒とい
い、牡は麟という。一説では、麒は角がなく、麟は角があるという。
牝が鳴くのは「遊聖」といい、牡が鳴くのは「帰和」という。春に鳴
くのは「扶幼」といい、秋に鳴くのは「養綏」という。王者が国をよ
く治めれば、麒麟が郊外に現れるという。

【出典】

有毛之蟲三百六十、而麒麟爲之長。(漢・戴德撰『大戴禮記』卷十三)
麒麟、仁獸也。各本無麒麟二字。今依初學記補。公羊傳曰、麟者、
仁獸也。何注、狀如麋、一角而戴肉。設武備而不爲害、所以爲仁者
也。麟者、木精。毛詩傳曰、麟信而應禮。左傳伏虔注、麟、中央土
獸。土爲精、信禮之子。修其母、致其子、視明禮修而麟至。思叡信
立、而白虎擾。言從义成、而神龜在沼。聽聽知正、而名川出龍。貌
恭性仁、則鳳凰來儀。此左氏、毛氏說與公羊說不同也。五經異義、
許慎謹案。禮運云、麟、鳳、龜、龍、謂之四靈。龍、東方也。虎、
西方也。鳳、南方也。龜、北方也。麟、中央也。是異義謂麟爲信獸。
從左、毛說矣。而此云仁獸、何也。異義早成、說文解字晚定。此云

張 小 銅

Zhang Xiaogang

青 山 愛

AOYAMA Ai

仁獸，用公羊說。以其角端戴肉，不履生蟲，不折生草也。鄭駁異義曰，五事，言作從，從作义，言於五事屬金。孔子作春秋，故應以金獸性仁之瑞。鄭說與奉德侯陳欽說略同，鄭云金獸性仁，許云仁獸，與鄭駁無異。但鄭君黨錮事解，箋毛詩，信而應禮，乃依毛說。與駁異義相違。是知學固與年而徙矣。麋身、牛尾、一角。從鹿，其聲牝麒也，從鹿，各聲。（漢・許慎撰、清・段玉裁注『說文解字』十篇上，鹿部）

【作例】

「麒麟」〔明・王圻、王思義『三才圖會』鳥獸三卷、萬曆三十七年〔1609〕刊本〕

「麒麟」〔鮮齋永濯繪『萬物雛形畫譜』初編、明治一二年〔1879〕刊本〕

「麒麟」〔鮮齋永濯繪『萬物雛形畫譜』五編、明治一二年〔1879〕刊本〕

「麒麟」〔繪本初心柱立』一、正徳五年〔1715〕刊本、寶暦一一年〔1761〕再刊本〕

きりんきんしょう 季倫錦障

晋の石崇（299～300）は字が季倫といい、青州（山東省）の生まれである。青州は春秋戦国時代の斉の故地であるため、故に綽名は「齊奴」という。幼い頃聡明であった。父親が亡くなった際、財産をほかの子供に分与したが、崇にだけ与えなかった。「この子は大きくなったら、自分で財を成せる」と妻に言った。崇が大きくなった後、荊州刺史や衛尉などの官職を歴任し、莫大な財産を作った。彼が貴族の王愷と贅沢を競うことは有名な話である。愷は紫色の絹生地で四〇里通路の障子を作ったが、崇は錦織の生地で五〇里通路の障子を作ったという。（唐・房玄齡等撰『晋書』卷三三）

【出典】

晋書、石崇字季倫。父苞位至司徒。臨終分財物與諸子。獨不及崇。其母以爲言。苞曰、此兒雖小、後自能得。爲荊州刺史、劫遠使商客、致富不貲。後拜衛尉。財產豐積、室宇宏麗、後房百數。皆曳紈繡、珥金翠、絲竹盡當時之選、庖膳窮水陸之珍、與貴戚王愷、羊琇之徒以奢靡相尚。愷以飴澳釜、崇以蠟代薪。愷作紫絲布步障四十里、崇作錦步障五十里、以敵之。崇塗屋以椒、愷用赤石脂。武帝每助愷。嘗以珊瑚樹賜之。高二尺許。枝柯扶疏、世所罕比。愷以示崇。崇以鐵如意擊碎。愷聲色方厲。崇曰、不足多恨。今還卿。乃命左右、悉取珊瑚樹。有高三四尺者六七株。條幹絕俗、光彩曜日、如愷比者甚衆。愷恍然自失。（唐・李瀚撰、宋・徐子光注『蒙求集注』卷下）

【作例】

「季倫錦障」〔下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷十、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行〕

きりんをとる 獲麒麟

叔孫氏の車の御者子鉏商が獸をとらえた。孔子がそれを見ると、「麒麟だ」と言った。

【出典】

魯哀公十四年春、狩大野。叔孫氏車子鉏商獲獸、以爲不祥。仲尼視之、曰、麟也。取之。曰、河不出圖、雒不出書、吾已矣夫。（漢・司馬遷撰『史記』卷四十七、孔子世家第十七）

【作例】

「西郊泣麟」〔明・呉嘉謨集校『孔聖家語圖』卷一、萬曆一七年〔1589〕刊本〕

ざりんつるぎをふるう 祇林揮劍

「祇林揮劍」は禪宗の公案の一つである。湖南の祇林和尚はいつも文殊と普賢を妖怪として責める。彼は手に木剣を持って、自分が魔を降伏すると言っている。人が彼に参上すると、彼がすぐ「魔が来た。魔が来た」と言いながら、剣を振りかざして方丈に戻る。こうして十二年後、彼が剣を置き無言となった。他の僧侶が彼に聞いた、「十二年前になぜ魔を降伏するか」と。和尚が「賊は貧しい家の子を殴らない」と。「十二年後なぜ魔を降伏しないか」と。「賊は貧しい家の子を殴らない」と。

【出典】

湖南 祇林和尚、每叱文殊 普賢皆為精魅。手持木劍、自謂降魔。纔見僧來參、便曰、魔來也。魔來也。以劍亂揮、歸方丈。如是十二年後、置劍無言。僧問、十二年前為甚麼降魔。師曰、賊不打貧兒家。曰、十二年後為甚麼不降魔。師曰、賊不打貧兒家。(宋・普濟撰『五燈會元』卷四、章敬暉禪師法嗣)

【作例】

「祇林揮劍」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷五、貞享四年 [1687] 刊本、文政一年 [1818] 再刊本)
「祇林揮劍」(某岡之繪『繪圖の林』巻下、元禄二年 [1689] 刊本)

きれんじとこうし 鬼臉兒杜興

杜興は『水滸伝』の中の一人の豪傑であり、綽名は「鬼臉兒」という。後に梁山泊に入った。

【出典】

楊雄道、這箇兄弟姓杜名興、祖貫是中山府人氏。因為他面顔生得龕莽、以此人都叫他做鬼臉兒。上年間做買賣來到薊州。只因一口氣上

打死了同夥的客人、吃官司監在薊州府裏。楊雄見他說起拳棒都省得、一力維持、救了他。不想今日在此相會。(百二十回本『水滸伝』第四十七回)

【作例】

「杜興」(清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分卷、天保六年 [1835] 和刻本)
「鬼臉兒杜興」(葛飾前北齋為一筆『繪本水滸伝』、文政一二年 [1820] 序、萬極堂梓)
「鬼臉兒杜興」(仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年 [1828] 不朽堂刻本)
「鬼臉兒杜興」(泉龍亭是正編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』三編、大橋堂梓、小田原屋又七板)

きろこく 蛇魯国

蛇魯国から応天府までは馬で七か月かかる。

【出典】

蛇魯国與木魯一般、至應天府(江蘇省南京)馬行七餘月。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷)

【作例】

「蛇魯国」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)
「蛇魯国」(橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻四、享保四年 [1719] 刊本)

きんいこうし 金衣公子

金衣公子は黄鶯のことを指す。唐の玄宗帝は、宮の花園の中で黄鶯を見る度に、「金衣公子」と呼んだという。

【出典】

明皇每於禁苑中見黃鶯，常呼之爲金衣公子。（五代・王仁裕撰『開元天寶遺事』卷上）

きんいひやくし 金衣百子

金衣とは黄鶯のことである。百子は石榴のことである。石榴に黄鶯という構図である。

【作例】

「金衣百子」（大原民聲編、浅野思成筆『名教畫譜』人、文化六年 [1809] 序刊本）

きんかいっしぜん 金華一指禪

↓「俱胝豎指」

【作例】

「金華一指禪」（文鳳山人「文鳳駿聲」『文鳳畫譜』三編、文化八年 [1811] 刊本）

きんかくだいおう・ぎんかくだいおう

金角大王・銀角大王

金角大王・銀角大王は『西遊記』に登場した二人の妖怪である。彼らは平頂山の蓮花洞に住んでいる。

【出典】

卻說那山叫做平頂山，那洞叫做蓮花洞。洞裡兩妖，一喚金角大王，一喚銀角大王。（吳承恩撰『圖像西遊記』第三十二回）

【作例】

「金角大王・銀角大王」（『畫本西遊全傳』二編卷）

きんかせき 金花石

↓「黄石公」

【作例】

「金花石」（橋宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷二、文政一年 [1808] 刊本）

きんがんひょうしおん 金眼彪施恩

金眼彪施恩は『水滸伝』の中の豪傑の一人である。父親は孟州の平安寨という刑務所の管管（所長）である。したがって彼は「小管管」と呼ばれていた。「金眼彪」は彼の綽名である。

【出典】

武松道，卻又踉蹌。我自是清河縣人氏，他自是孟州人，自來素不相識，如何這般看覷我。必有個緣故。我且問你，那小管管姓甚名誰。那人道，姓施名恩，使得好拳棒，人都叫他做金眼彪施恩。（百二十回本『水滸伝』第二十九回）

【作例】

「金眼彪施恩」（明・陳洪綬『水滸葉子』、天啓六年 [1626] 刊本）

「施恩」（清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分卷、天保六年 [1835] 和刻本）

「金眼彪施恩」（葛飾前北斎爲一筆『繪本水滸伝』、文政一二年 [1820] 序、萬極堂梓）

「金眼彪施恩」（仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年 [1808] 不朽堂刻本）

「金眼彪施恩」（江境菴花川編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』初編、慶應三年 [1867] 序、大橋堂梓・蔵板）

きんきしよが 琴棋書画

中国の文人趣味としてよく知られている琴、棋、書、画は画題としてよく見られる。画中の人物は士人だけでなく、婦人や子供など様々のヴァリエーションがある。

【作例】

「琴棋書画」〔中国楊柳青年画線版選〕、天津楊柳青画社、1999年)

「琴棋書画」〔『蘇州桃花塢木版年画』、江蘇古籍出版社・香港嘉賓出版社、1991年)

「琴棋書画」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷二、貞享四年

[1687] 刊本、文政一年 [1818] 再刊本)

「琴棋書画」〔唐子〕(蕙斎北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年 [1794] 刊本)

「琴棋書画」(文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年 [1803] 刊本)

「琴棋書画」(文鳳駿聲『文鳳壽畫』、享和三年 [1803] 刊本)

「琴棋書画」(鮮斎永濯繪『萬物雛形畫譜』五編、明治一二年 [1879] 刊本)

「無題」〔琴棋書画〕(森玄黄齋畫『印籠譜』坤、清浄軒、天保一〇年 [1839] 刊本)

きんぎゅうはんとう 金牛飯筒

「金牛飯筒」は禅宗の公案の一つである。金牛和尚は唐代の人であり、鎮州(河北省正定)の人である。金牛が自ら炊事をして僧侶の皆さんに提供する。いつも食事の時に、ご飯の桶を持って大広間の前で踊る。「菩薩子、ご飯だよ」と言いながら、両手を叩いて大笑いをする。毎日一通りする。

【出典】

鎮州 金牛和尚、師自作飯供養衆僧、每至齋時、昇飯桶到堂前作舞、曰、菩薩子、喫飯來、乃撫掌大笑、日日如是。(宋・釋道原撰『景徳傳燈錄』卷八)

【作例】

「金牛飯筒」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷五、貞享四年 [1687] 刊本、文政一年 [1818] 再刊本)

「金牛飯筒」(某岡之繪『繪圖の林』卷下、元禄二年 [1689] 刊本)

きんぎよくまんどう 金玉满堂

「金玉满堂」は唐子がガラスの水槽にいっぱい泳いでいる金魚を玩んでいる絵である。金魚は中国語で「jīnyú」と発音するため、金玉「jīnyú」に似ている。また堂は「táng」と発音し、水槽の壇「tán」の発音と似ているため、その語呂合わせで「財産いっぱい」、「幸せいっぱい」を意味する。中国年画の中によく見られる。

【作例】

「金玉满堂」(中国濰坊清末年画)、山東畫報出版社、2004年)

きんけい 錦鶏

錦鶏はまた鷓鴣ともいい、五色の羽毛がある。南越の山に生息している。毎年王様の飾り用のために、錦鶏が捕捉される。

【出典】

錦雞腹有彩文、状如鳩鴿鶯鳥、備五色、如孔雀羽。出于南越山中、歲採捕之。爲王者冠服之飾。又名鷓鴣。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸二卷)

【作例】

「錦鶏」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸二卷、萬曆三十七年

[1609] 刊本)

「錦鷄」(葛飾戴斗畫『花鳥畫傳』、嘉永二年 [1829] 叙刊本)

きんこう 金高

「金高」は「琴高」と同じ発音であるが、「琴高」の誤りである。

↓「琴高仙人」

【作例】

「金高」(橘守国『繪本直指寶』卷五、延享二年 [1745] 刊本)

きんこうせんじん 琴高仙人

琴高は趙の人である。琴を演奏するのが得意である。冀州と涿郡（一説は碭郡）の間に行き来して二百年あまりである。後に涿水（一説は碭水）に潜り込み、龍の子を取りに行った。行く前に弟子たちと帰る日を約束した。その日に弟子たちは皆沐浴し、祠を設けて、川辺で待ち迎えた。すると、琴高は果たして赤い鯉に乗って戻ってきた。見物の人は一万人ぐらいた。一カ月後、琴高は再び川に入った。葛玄が仙人になったのを聞き、琴高はわざわざ二匹の鯉に乗って会いに行ったという。

【出典】

琴高者、趙人也。以鼓琴爲宋康王舍人。行涓、彭之術，浮游冀州、涿郡之間二百餘年。後辭入涿水中，取龍子。與諸弟子期，曰，皆潔齋，待於水傍，設祠。果乘赤鯉來，出坐祠中，且有萬人觀之。留一月餘，復入水去。（漢・劉向撰『列仙傳』卷上）

仙人琴高聞仙公得道。自東海跨雙鯉來訪。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷四，葛玄條）

【作例】

「琴高」(明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷一、萬曆二八年 [1600])

刊本)

「琴高」(清・任熊繪『列仙酒牌』、咸豐四年 [1854] 刊本)

「琴高跨鯉」(『點石齋叢書』、光緒十一年 [1885] 序、上海點石齋書局石印本)

「琴高跨鯉圖」(王念慈編『當代名畫大觀』初集第三冊人物類、碧梧山莊石印本、中國古畫譜集成第十五卷、山東美術出版社、2000年)

「琴高」(渡邊瑛編『邊氏畫譜』、文化三年 [806] 刊本)

「琴高」(馬場信意撰『分類畫本良材』卷五、正徳五年 [715] 刊本)

「琴高」(林守篤編述『畫筌』卷四、正徳二年 [1712] 序、享保六年 [1721] 刊本)

「琴高」(寂照主人月憍寫並題『列仙圖贊』一、天明四年 [1784] 刊本)

「琴高」(蕙齋北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年 [1794] 刊本)

「琴高」(文鳳駿聲『文鳳籠畫』、享和三年 [803] 刊本)

「琴高」(武者周榮筆『古畫要覽』、安永九年正月 [1780] 刻成、文化九年 [1812] 求版)

「琴高」(鍬形蕙齋『人物略畫式』、文化一〇年 [813] 刊本)

「琴高仙人圖」(尾形光琳『光琳百圖』上、文化一二年 [815] 跋刊本)

「琴高」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷三、文政一年 [1818] 刊本)

「琴高仙人」(河鍋洞郁『晧齋醉畫』初編、明治一五年 [882] 刊本)

「琴高仙人」(滝澤清畫『潛龍畫譜』人物之部、明治一五年 [1882] 刊本)

「無題」(『圓翁畫譜』)

きんこくえん 金谷園

晋の石崇が荊州刺史だった頃、河陽の金谷（河南省孟津）で別館を建て、名付けて「金谷園」といい、また「梓澤園」ともいう。その広大な敷地の中には泉が流れて、林が繁々としている。その緑の中には数百軒の屋敷が見え隠れている。中で働いている下僕が八百人以上であった。石崇は時々そこで宴会を開いた。料理はいつも最高のものが出され、どれも見たことのない珍羞である。宴会は徹夜し、延々として続き、何回も場所を変え、琴や瑟や笙や築などの楽器はすべて車に積んで、移動できるようにする。敷地内の道路がきちんと整備されている。

【出典】

石崇、字季倫、渤海清河人。苞之子、生於青州、故小字齊奴。苞六男、崇は小子。苞臨終、分諸子財、獨不及崇。其母爲之言、苞曰、此兒雖小、大能自得。拜黃門、累遷荊州刺史。劫商致富、遷征虜將軍。崇有別館、在河陽之金谷園、一名梓澤。諂事賈謐、與潘岳爲二十四友。有水碓三十餘區、蒼頭八百餘人。（唐・陸龜蒙撰『小名錄』卷上）

金谷園、石崇爲荊州刺史時、劫遠使商客、致富不貲。有別館、在河陽之金谷、一名梓澤園。中有清泉茂林、竹柏藥草之屬、莫不畢備。嘗與衆客遊宴、屢遷其處。或登高臨下、或列坐水濱、琴瑟笙簧合載車中、道路並作、令與鼓吹通奏、晝夜不倦。後房數百、俱極佳麗之選、以較羞精麗相高、求市恩寵。（明・張岱撰『夜航船』卷十一）

きんさ・きんのう 金沙・金王

金沙と金王は西王母の侍女である。

【作例】

「金沙金王」（橋宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』、貞享四年〔1687〕刊本、文政一年〔1818〕再刊本）

きんざんじ 金山寺（金山龍微寺）

金山寺は唐代の僧侶裴氏が地面を掘って金が見つかったことで有名であった。金山は長江のど真ん中の島で、江蘇省鎮江にある。

【出典】

金山者、以唐裴頭陀掘地得金而名也。山爲大江孤島、口漲截洞、波濤日夕、撼之如砥柱。寺前小島、儼立左爲棲鶴、右爲白雲、白雲卽郭璞墓也。環島盤渦轉數、舟近之則陷入窟、彷彿所稱三神山、可望而不可濟云。島壯龍宮水府。昔人立石華表、使舟不得近。煙雲暝而誤入者、山頂則擊鐘聲招之、門不可泊舟。凡至寺中者、皆由雄跨閣。閣額舊爲宋仁宗御書飛白、張之則波濤洶湧、蛟龍出沒。故藏而不張。今不復存。寺右有龍井、陸羽品爲江南第一泉。或以山在江心、稱中瀟水。或云源與中冷水府、通半山、左上爲江天閣。憑欄則怒濤百里、千櫓在足下丹徒飛。（明・楊爾曾撰『海內奇觀』卷二）

【作例】

「金山寺」（京口三山図）（明・楊爾曾撰『海內奇觀』卷二）
 「金山寺」（京口三山図）（明・王圻、王思義撰『三才図会』地理七卷）
 「金山寺」（普齋岡子雉著述「大岡普齋」、橋辨次守国「橋辨次」圖畫『畫典通考』卷四、享保一二年〔1727〕刊本）

きんし 金氏**【作例】**

「金氏」（「明の安東の人で虎を退治する」（普齋岡子雉著述「大岡普齋」、橋辨次守国「橋辨次」圖畫『畫典通考』卷五、享保一二年

[1727] 刊本)

きんしゅうしゅじょねい 金鎗手徐寧

金槍手徐寧は『水滸伝』の豪傑の一人である。もとは東京（開封）の金槍班の教師であったが、後に従兄の湯隆に連れられて、梁山泊に入った。宋江は徐寧の鈎鎌槍法で呼延灼の連環甲馬陣を破った。

【出典】

湯隆對衆頭領說道、小可是祖代打造軍器爲生。先父因此藝上、遭際老種經略相公、得做延安知寨。先朝曾用這連環甲馬取勝。欲破陣時、須用鈎鎌鎗可破。湯隆祖傳已有畫樣在此。若要打造、便可下手。湯隆雖是會打、卻不會使。若要會使的人、只除非是我那箇姑舅哥哥。他在東京、見做金鎗班教師。這鈎鎌鎗法、只有他一箇教頭。他家祖傳習學、不教外人。或是馬上、或是步行、都有法則。端的使動、神出鬼沒。說言未了、林沖問道、莫不是見做金鎗班教師徐寧。湯隆應道、正是此人。（百二十回本『水滸伝』第五十六回）

【作例】

「金鎗手徐寧」(明・陳洪綬繪『水滸葉子』、天啓六年 [1626] 刊本)
 「徐寧」(清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分卷、天保六年 [1835] 和刻本)
 「金鎗手徐寧」(葛飾前北齋爲一筆『繪本水滸伝』、文政十二年 [1829] 序、萬極堂梓)
 「金鎗手徐寧」(仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年 [1848] 不朽堂刻本)
 「金鎗手徐寧」(江境菴花川編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』初編、慶應三年 [1867] 序、大橋堂梓・藏板)

きんしん 金申

金申は潞城（山西省潞城）の人である。幼い頃、彼は聡明であった

が、後に狂人のふりをし、仙人に出会い、太陰煉形の術を教わった。かつて一重の服だけを着て裸足で、氷雪の中に横になっていた。洪水や干ばつなどを予知することができる。亡くなって埋葬され、百日経った、ある日、雷が激しくなった後、金申の墓が数寸割れて、中には金申の亡骸がなく、靴と扇子と服のひもだけが残っていたという。

【出典】

金申、潞城人。幼聰慧、復佯狂。遇異人、授以太陰煉形之術。嘗草衣跣足、臥冰雪中。能預知水旱災祥壽歿。既卒、葬百餘日。一夕雷震大作、及且視之、但見塚開數寸。惟留雙履、梭扇、薄衾而已。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷二）

【作例】

「金申」(王世貞撰『有象列仙全傳』卷二、萬曆二十八年 [600] 刊本)
 「金申」(馬場信意撰『分類畫本良材』卷五、正徳五年 [715] 刊本)
 「金申」(寂照主人月僊寫並題『列仙圖贊』二、天明四年 [1824] 刊本)

きんしん 金神

伝説によると、金神は西方で「蓐收」といい、左耳に青大将がおり、二匹の龍に乗る。郭璞の注によると、人面、虎の爪、白い毛、手に鉞という武器を持つという。

【出典】

西方蓐收、金神也。左耳有青蛇、乘兩龍。郭璞注：金神也。人面、虎爪、白毛、執鉞。（晉・郭璞注『山海經・海外西經』卷七）
 西方蓐收、金神也。左耳有青蛇、乘兩龍、而目有毛、虎爪執鉞。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四卷）

【作例】

「葦収」（金神）（明・胡文煥編纂『山海經図』巻上、萬曆二十一年 [1593] 刻本）

「金神」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本）

「金神」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻五、享保四年 [1719] 刊本）

きんじんめい 金人銘

孔子は周の廟を見学した際、その中の金人を見て三回も口を閉じた。その背中の銘文によると、「古代の慎言人であり、戒めに戒めて、戒めに戒める。余計なことを言うな、多言だと失敗が多い。余計なことをするな、多事だと禍が多い」という。

秦の始皇帝二十一年（前226）、長身の異域の人が臨洮に現れた。身長は五丈あり、足は六尺ある。始皇帝は縁起がいいと思ひ、十二人を模つて金人の像を作つた。その銘文は胸にあり、「皇帝二十六年〔前221〕、初めて天下を統一して郡県の行政区域を作りなおした。法律を整備し、度量衡を統一した。大きい人が臨洮に来た。」と云々。李斯の書だつたという。

【出典】

二十六年、長狄十二見于臨洮、長五丈餘、以爲善祥、鑄金人十二以象之。各重二十四萬斤、坐之宮門之前、謂之金狄、皆銘其胸。云、皇帝二十六年、初兼天下、以爲郡縣、正法律、同度量。大人來見臨洮、身長五丈、足六尺。李斯書也。故衛恆敘篆曰、秦之李斯、號爲工篆、諸山碑及銅人銘、皆斯書也。漢自阿房、徙之未央官前、俗謂之翁仲矣。地皇二年、王莽夢銅人泣、惡之、念銅人銘有皇帝初兼天下文、使尚方工鑄滅所夢銅人膺文。後董卓毀其九爲錢。其在者三、魏明帝欲徙之洛陽、重不可勝、至灞水西、停之。漢晉春秋曰、或言

「金狄泣、故留之、石虎取置鄴宮、苻堅又徙之長安、毀二爲錢、其一未至而苻堅亂、百姓推置陝北河中、于是金狄滅。」（後魏・酈道元撰『水經注』巻四）

孔子觀周廟有金人焉。三緘其口、而銘其背、曰、古之慎言人也。戒之哉。戒之哉。毋多言、多言多敗。毋多事、多事多患。（明・張岱撰『夜航船』巻十三）

【作例】

「金人圖」（明・程大約『程氏墨苑』巻五、萬曆二一〜三十七年 [1594-1609] 刊本）

「金人銘」（橘宗重著、長谷川等雲繪『増補繪本寶鑑』巻三、享保年間 [1716〜1736] 刊本）

きんせんひょうしとうりゅう 金錢豹子湯隆

湯隆は『水滸伝』の中の一人の豪傑であり、綽名は「金錢豹子」という。後に梁山泊に入った。

【出典】

那漢道、小人姓湯名隆、父親原是延安府知寨官來。因爲打鐵上遭際老種經略相公帳前敘用。今年父親在任亡故。小人貪賭、流落在江湖上。因此權在此間打鐵度日。入骨好使槍棒。爲是自家渾身有麻點、人都叫小人做金錢豹子。（百二十回本『水滸傳』第五十四回）

【作例】

「金錢豹子湯隆」（葛飾前北齋爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年 [1829] 序、萬極堂梓）

「金錢豹子湯隆」（仮名垣魯文標記、一雲齋國久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年 [1848] 不朽堂刻本）

「金錢豹子湯隆」（江境菴花川編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』初編、慶應三年 [1867] 序、大橋堂梓・蔵板）

さんのうけいちようんしゆをすくうず

錦囊計趙雲救主圖

劉備が孫權の妹を娶った後、安逸な夫婦生活に耽り、荊州に帰る氣持がなくなつた。そこで、趙雲が諸葛孔明の錦囊に用意された策略を使い、劉備を荊州に帰るよう催促した。しかし途中周瑜の武将徐盛と丁奉に止められた。そこで、趙雲は再び錦囊を開け、諸葛孔明の最後の策略を使い、無事に劉備夫婦を荊州まで護送できた。

【出典】

卻說趙雲與五百軍在東府前往，終日無事，只去城外射箭走馬。看看年終，雲猛醒。孔明分付三箇錦囊與我，教我一到南徐，開第一箇。住到年終，開第二箇。臨到危急無路時，開第三箇。于內有神出鬼沒之計，可保主公回家。此時歲已將終，主公貪戀女色，並不見面，何不拆開第二箇錦囊，看計而行。遂拆開視之。原來如此神策。即日徑到府堂，要見玄德。侍婢報曰，趙子龍有緊急事來報貴人。玄德喚入問之。雲伴作失驚之狀，曰，主公深居畫堂，不想荊州耶。玄德曰，有甚事如此驚怪。雲曰，今早孔明使人來報，說曹操要報赤壁慶兵之恨，起精兵五十萬，殺奔荊州，甚是危急，請主公便回。玄德曰，必須與夫人商議。雲曰，若和夫人商議，必不肯教主公回。不如休說，今晚便好啟程。遲則誤事。玄德曰，你且暫退，我自自有道理。雲故意催逼數番而出。〔中略〕此時只瞞着孫權，夫人乘車，止帶隨身一應細軟。玄德上馬，引數騎跟隨出城，與趙雲相會。〔中略〕當日徐盛、丁奉了望得玄德一行人到，各綽兵器截住去路。玄德驚慌勒回馬問趙雲曰，前有攔截之兵，後有追趕之兵，前後無路，如之奈何。雲曰，主公休慌。軍師有三條妙計，多在錦囊之中，已拆了兩箇，并皆應驗。今尚有第三箇在此，分付遇危難之時，方可拆看。今日危急，當拆觀之。便將錦囊拆開，獻于玄德。玄德看了，急來車前泣告孫夫人曰，

備有心腹之言，至此盡當實訴。夫人曰，丈夫有何言語，實對我說。玄德曰，昔日吳侯與周瑜同謀，將夫人招嫁劉備。實非爲夫人計，乃欲幽囚劉備而奪荊州耳。奪了荊州，必將殺劉備。是以夫人爲香餌而釣備也。備不懼萬死而來，蓋知夫人有男子之胸襟，必能憐備。昨聞吳侯將欲加害，故托荊州有難，以圖歸計。幸得夫人不棄，同至於此。今吳侯又令人在後追趕，周瑜又使人于前截住，非夫人莫解此禍。如夫人不允，備請死于車前，以報夫人之德。夫人怒曰，吾兄既不我以爲親骨肉，我有何面目重相見乎。今日之危，我當自解。於是叱從人推車直出，捲起車簾，親喝徐盛、丁奉曰，你二人欲造反耶。徐、丁二將慌忙下馬，棄了兵器，聲喏于車前曰，安敢造反。爲奉周都督將令，屯兵在此專候劉備。孫夫人大怒曰，周瑜逆賊，我東吳不曾虧負你。玄德乃大漢皇叔，是我丈夫。我已對母親、哥哥說知回荊州去。今你兩箇于山腳去處，引着軍馬攔截道路，意欲劫掠我夫妻財物耶。徐盛、丁奉喏喏連聲，口稱不敢。請夫人息怒。這不干我等之事，乃是周都督的將令。孫夫人叱曰，你只怕周瑜，獨不怕我。周瑜殺你，我豈殺不得周瑜。把周瑜大罵一場，喝令推車前進。徐盛、丁奉自思，我等是下人，安敢與夫人違拗。又見趙雲十分怒氣，只得把軍喝住，放條大路教過去。（『三國演義』第五十五回）

【作例】

「錦囊計趙雲救主」（『三國志通俗演義』卷六、萬曆十九年〔1591〕刊本）
 「錦囊計趙雲救主」（百二十回本『李卓吾先生批評三國志』第五十五回、明末建陽吳觀明刊本）
 「錦囊計趙雲救主圖」（橋有稅「橋氏宗兵衛」『繪本寫寶袋』卷七、享保五年〔1720〕刊本）

きんひょうしょうりん 錦豹子楊林

楊林は『水滸伝』の中の一人の豪傑であり、綽名は「錦豹子」という。後に梁山泊に入った。

【出典】

那漢道、小弟姓楊名林、祖貫彰德府人氏、多在綠林叢中安身。江湖上都叫小弟做錦豹子楊林。(百二十回本『水滸傳』第四十四回)

【作例】

「楊林」(清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分卷、天保六年〔1835〕和刻本)
 「錦豹子楊林」(葛飾前北斎爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年〔1829〕序、萬極堂梓)

「錦豹子楊林」(仮名垣魯文標記、一雲齋国久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年〔1848〕不朽堂刻本)

「錦豹子楊林」(柳水亭種清著、葵岡北溪畫『水滸畫傳』、安政三年〔1856〕序、甘泉堂板)

「錦豹子楊林」(泉龍亭是正編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』三編、大橋堂梓、小田原屋又七板)

きんぶつこく 近佛國

近仏国は東南海上にあり、島が多い。そこに野蛮人が住んでおり、「麻羅奴」と号す。商船がそこを通ると、船の人を捕まえ、竹で挟んで焼いて食すという。

【出典】

近佛國在東南海上、多野島、蠻賊居之、號麻羅奴。商舶至其國、羣起擒之、以巨竹夾而燒食。人頭爲食器、父母死則召親戚搥鼓、共食其尸肉、非人類比也。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷)

【作例】

「近佛國」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷、萬曆三十七年〔1609〕刊本)

「近佛國」(橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷四、享保四年〔1719〕刊本)

きんもつけんだんけいじゆう 金毛犬段景住

段景住は『水滸伝』の中の一人の豪傑であり、綽名は「金毛犬」という。

【出典】

那漢答道、小人姓段、雙名景住、人見小弟赤髮黃鬚、都呼小人爲金毛犬。祖貫是涿州人氏。平生只靠去北邊地面盜馬。今春去到鎗竿嶺北邊、盜得一疋好馬、雪練也似價白、渾身並無一根雜毛、頭至尾長一丈、蹄至脊高八尺。那馬又高又大、一日能行千里。北方有名、喚做照夜玉獅子馬。乃是大金王子騎坐的。放在鎗竿嶺下、被小人盜得來。江湖上只聞及時雨大名、無路可見、欲將此馬前來進獻與頭領、權表我進身之意。不期來到凌州西南上曾頭市過、被那曾家五虎奪了去。小人稱說是梁山泊宋公明的。不想那廝多有不穢的言語、小人不敢盡說。逃走得脫、特來告知。(百二十回本『水滸傳』第六十回)

【作例】

「段景住」(清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分卷、天保六年〔1835〕和刻本)

「金毛犬段景住」(葛飾前北斎爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年〔1829〕序、萬極堂梓)

「金毛犬段景住」(仮名垣魯文標記、一雲齋国久畫『繡像水滸銘々傳』前編下、弘化五年〔1848〕刊本)

きんもうこえんじゅん 錦毛虎燕順

錦毛虎燕順は『水滸伝』の中の豪傑の一人である。錦毛虎は彼の綽名である。もと羊と馬を販売する商人であったが、商売に失敗したため、盗賊になった。後に梁山泊に合流した。

【出典】

那箇好漢祖貫[山東]萊州人氏、姓燕名順、別號錦毛虎。原是販羊馬客人出身。因爲消折了本錢、流落在綠林叢內打劫。（百二十回本『水滸傳』第三十二回）

【作例】

「燕順」（清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分卷、天保六年〔1835〕和刻本）
 「錦毛虎燕順」（葛飾前北齋爲一筆『繪本水滸傳』、文政十二年〔1829〕序、萬極堂梓）
 「錦毛虎燕順」（仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年〔1828〕不朽堂刻本）
 「錦孟虎燕順」（泉龍亭是正編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』三編、大橋堂梓、小田原屋又七板）

きんりゅうぶおつをまもる

金龍護武王

【作例】

「金龍護武王」（法橋玉山畫『畫本玉藻譚』卷二、文化二年〔1865〕刊本）

きんりょうほうおうだいのず 金陵鳳凰臺圖

唐の李白の七言詩『登金陵鳳凰臺』によるものである。

【出典】

鳳凰臺上鳳凰遊、鳳去臺空江自流。吳宮花草埋幽徑、晉代衣冠成古丘。三山半落青天外、二水中分白鷺洲。總爲浮雲能蔽日、長安不見使人愁。（李白「登金陵鳳凰臺」、清・彭定求等編『全唐詩』卷一百八十）

【作例】

「鳳凰臺」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理卷六、萬曆三十七年〔1609〕刊本）
 「金陵鳳凰臺圖」（晚香散人内藤道有作、橘守国繪『和漢新圖扶桑畫譜』卷五、享保二〇年〔1735〕刊本）

きんれんぼ 金蓮歩

↓「潘妃金蓮」

く行

くうちゅうろうし 空中老子

老子は函谷関で尹喜に慰留され、『道德経』を書き残し、空中に上昇し、去って行ったという。

↓「尹喜」

【作例】

「空中老子」（橘守国『繪本鶯宿梅』卷三、元文五年〔1740〕刊本）

ぐえんこくき 虞延刻期

後漢の虞延（?～?）は、字が子大といい、陳留（河南省開封）

の東昏の人である。延は建武初年、細陽令に任ぜられ、毎年冬の臘月に期限付きで犯人たちを家に帰す。皆が彼に恩義に思い、期限になったら必ず戻る。ある犯人が家で病気になったが、期限通りに自ら車に乗って戻った。着いた際、亡くなった。そこで延は部下を率いて彼を埋葬した。そのため、人々は皆延に感謝する。(南朝宋・范曄撰『後漢書』巻六三)

【出典】

後漢 虞延字子大，陳留東昏人。延初生，其上有物。若一匹練，遂上昇天。占者以爲吉。及長，長八尺二寸，要帶十圍，力能扛鼎。性敦樸，不拘小節，又無鄉曲之譽。王莽末，天下大亂。延常嬰甲冑，擁衛親族，扞禦鈔盜，賴其全者甚衆。建武初，除細陽令。每至歲時伏臘，輒休遣徒繫歸家。並感恩德，應期而還。有囚於家被病，自載詣獄。既至而死，率掾官屬，殯於門外。百姓感悅。永平中爲三公。(唐・李翰撰、宋・徐子光注『蒙求集注』巻下)

【作例】

「虞延刻期」(下河邊拾水圖解、吉備祥顯考訂『蒙求圖會』二編巻九、享和元年〔801〕序刊本、河内屋等發行)

くこ 枸杞

枸杞は山に生えている。根幹が曲がりくねって可愛らしい。実った種が赤く、枝の間に飾っているようである。呉中の好事者がそれを盆栽にする。

【出典】

枸杞，諸山中有之。老本虬曲可愛，結子紅甚，點點若綴。吳中好事之家往往裝之，爲几案間，供玩其葉。初萌采多點茶甚佳。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十二巻)

【作例】

「枸杞」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十二巻、萬曆三十七年〔1609〕刊本)

「枸杞」(中村惕斎『訓蒙圖會』巻十九、寛文六年〔1667〕刊本)

くこう 愚公

太行、王屋といった二つの山はもとも冀州南、河陽の北にある。愚公は九十歳の翁である。山に面して住んでおり、出入りは大変不便である。そのため、愚公は家族会議を開き、「私は皆と力を合わせて前の山を移したい」と提案したが、妻は疑問に思った。しかし皆が賛成したため、愚公は子孫たちを率いて工事を始めた。近所に住んでいゝる未亡人の子供も手伝いに跳んで来た。土砂を渤海に捨てるために、往復一年間かかる。河曲に住んでいる智叟は笑いながら、止めようとした。しかし、愚公はちつとも動揺しなかった。愚公の行動は天帝を感動した。帝は夸娥氏の二人の子供に命じて、太行、王屋二つの山を移させた。一つは朔東に、一つは雍南に移した。それ以来、愚公の家からまっすぐに冀州の南と漢の陰に行けるようになった。

【出典】

太行 王屋二山，方七百里，高萬仞。本在冀州之南，河陽之北。北山愚公者，年且九十，面山而居。懲山北之塞，出入之迂也。聚室而謀曰，吾與汝畢力平險，指通豫南，達於漢陰，可乎。雜然相許。其妻獻疑曰，以君之力，曾不能損魁父之丘，如太行王屋何，且焉置土石。雜曰，投諸渤海之尾，隱土之北。遂率子孫荷擔者三夫，叩石墾壤，箕畚運於渤海之尾。鄰人京城氏之孀妻，有遺男始龕，跳往助之。寒暑易節，始一反焉。河曲智叟笑而止之，曰，甚矣汝之不惠。以殘年餘力，曾不能毀山之一毛，其如土石何。北山愚公長息曰，汝心之固，固不可徹，曾不若孀妻弱子。雖我之死，有子存焉。子又生

孫、孫又生子、子又有子、子又有孫、子子孫孫、無窮匱也。而山不加增、何苦而不平。河曲智叟亡以應。操蛇之神聞之、懼其不已也、告之於帝。帝感其誠、命夸蛾氏二子負二山。一厝朔東。一厝雍南。自此冀之南。漢之陰。無隴斷焉。（『列子』卷五、湯問第五）

【作例】

「愚公」（大岡春卜『和漢故事卜翁新畫』卷四、寛延四年〔寶曆一年〕序、寶曆三年〔1753〕刊本）

ぐんこういざん 愚公移山

↓「愚公」

くこく 狗國

狗國の人は体が人間で首が犬である。長い毛で着衣しない。話をすると犬のように吠える。その妻は皆人間で漢のことが話せる。貂の革の服を着、穴のような洞窟に住み、生の食べ物を食す。応天府まで二年二か月かかるという。

【出典】

「狗國、人身狗首、長毛不衣、語若犬噪。其妻皆人、能漢語、衣貂鼠皮、穴居食生。妻女食熟、自相嫁娶。昔有中國人至其國、妻使逃歸、與筋十餘雙、教其每走十餘里、遺一筋、狗見其家物、必銜歸。其人乃脫則追不及矣。至應天府行二年二箇月。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十二卷）

【作例】

「狗國」（明・王圻、王思義撰『三才圖繪』人物十二卷、萬曆二七年

〔1609〕刊本）

「狗國」（橋有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷五、享保四年〔1719〕刊本）

くし 狗子

【作例】

「狗子」（王元章筆）（法眼春卜一翁『和漢名畫苑』初卷、寛延二年〔1749〕序刊本）

ぐし 虞氏

↓「虞美人」

【作例】

「虞氏」（馬場信意『分類畫本良材』卷四、正徳五年〔1715〕刊本）
 「虞氏」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年〔1803〕刊本）
 「虞氏」（文鳳駿聲『文鳳麓畫』、享和三年〔1803〕刊本）

くしぶつしょう 狗子佛性

「狗子佛性」はまた「趙州狗子」ともい、禪宗の公案の一つである。僧侶から「犬に佛性があるか」との質問があった。趙州從諗禪師が「ない」と答えた。「上から諸佛、下まで螻蟻は皆佛性があるのに、なぜ犬だけがないか」と。「それはまだ業識があるからだ」と。

【出典】

問、狗子還有佛性也無。師曰、無。曰、上至諸佛、下至螻蟻、皆有佛性、狗子爲甚卻無。師曰、爲伊有業識在。（宋・普濟撰『五燈會元』卷四、南泉願趙州法嗣）

くじやく 孔雀

孔雀の尻尾は色がよく変わる。赤になったり、黄色になったりする。人が孔雀の尻尾を叩くと、すぐ踊ってくれる。

【出典】

『博物志』云、孔雀尾多變色、或紅或黃、其色無定。人拍其尾則舞。尾有金翠、五年而後成。初春乃生、三四月後復凋。雌者不冠、尾短無金翠、性頗妬忌、自矜其尾。雖馴養已久、遇婦女童子服錦綵者、必逐而啄之。每欲山棲、先擇置尾之地、故欲生捕者、候雨甚往擒之、以愛其尾、不復驚揚也。南越志曰、孔雀不必匹合、正以音影相接便孕、亦與蛇偶。禽經曰、鵠見蛇則噪而黃、孔見蛇則宛而躍。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一卷)

【作例】

- 「孔雀」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)
- 「孔雀」(『繪本初心柱立』一、正徳五年 [1715] 刊本、寶曆十一年 [1761] 再刊本)
- 「孔雀」(蕙斎北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年 [1794] 刊本)
- 「孔雀」(葛飾戴斗畫『花鳥畫傳』、嘉永二年 [1819] 叙刊本)
- 「黒孔雀・白孔雀」(葛飾戴斗畫『花鳥畫傳』、嘉永二年 [1849] 叙刊本)
- 「孔雀」(鮮斎永濯繪『萬物雛形畫譜』一編、明治十二年 [1879] 刊本)
- 「孔雀」(溪斎義信筆『溪斎浮世畫譜』)

ぐせいなん 虞世南

虞世南 (558 - 638)、字は伯施とごい、越州餘姚(浙江省餘姚)の人である。彼は子供の頃、勉強が好きで文章が得意であった。後に彼は唐太宗の幕僚となり、厚い信頼を受けていた。功績により、彼の似顔が凌煙閣に描かれた。彼は秘書監、銀青光祿大夫、弘文館學士などを歴任した後、八十一歳で亡くなった。諡は「文懿」という。

【出典】

虞世南、字伯施、越州餘姚人、隋内史侍郎世基之弟也。祖檢、梁始興王諮議、父荔、陳太子中庶子、俱有重名。叔父寄、陳中書侍郎、無子、以世南繼後、故字曰伯施。世南性沈靜寡欲、篤志勤學、少與兄世基受學於吳郡顧野王、經十餘年、精思不倦、或累旬不盥櫛。善屬文、常祖述徐陵、陵亦言世南得己之意。又同郡沙門智永善王羲之書、世南師焉、妙得其體、由是聲名籍甚。「中略」太宗滅建德、引爲秦府參軍。尋轉記室、仍授弘文館學士、與房玄齡對掌文翰。太宗嘗命寫列女傳以裝屏風、于時無本、世南暗疏之、不失一字。太宗昇春宮、遷太子中舍人。及即位、轉著作郎、兼弘文館學士。時世南年已衰老、抗表乞骸骨、詔不許、遷太子右庶子、固辭不拜、除秘書少監。上聖德論、辭多不載。七年、轉秘書監、賜爵永興縣子。太宗重其博識、每機務之隙、引之談論、共觀經史。世南雖容貌懦弱、弱不勝衣、而志性抗烈、每論及古先帝王爲政得失、必存規諷、多所補益。「中略」十二年、又表請致仕、優制許之、仍授銀青光祿大夫、弘文館學士、賜祿、防閑並同京官職事。尋卒、年八十一。太宗舉哀於別次、哭之甚慟。賜東園秘器、陪葬昭陵、贈禮部尚書、諡曰文懿。(後晉・劉昫等撰『舊唐書』卷七十二、列傳第二十二)

【作例】

- 「虞世南」(虞文懿像)(清・顧沅輯『古聖賢像傳略』卷六、道光一〇年 [1830] 刻本)
- 「虞世南」(橘宗兵衛「有税」繪『繪本通寶志』卷五上、享保一四年 [1729] 刊本)

くつげん 屈原

屈原 (前343 - 277)、名は平という。楚の懷王の左徒であった。博学で、政治の能力があつて、外交の辞令もよくできる。内政では王の

側近として画策して号令を出す。外交では賓客を迎え入れて、諸侯と応酬する。王は彼を最も信頼していた。しかし、同じ位の上官大夫はそれに嫉妬し、懷王の前に屈原の悪口を言う。とうとう屈原が疎外され、そして政治の中心から追放された。屈原は自分の気持ちを表すために、『離騷』という有名な詩集を作った。最後に、絶望の中、汨羅江に飛び込み自殺した。

【出典】

屈原者、名平、楚之同姓也。為楚懷王左徒。博聞彊志，明於治亂，嫻於辭令。入則與王圖議國事，以出號令。出則接遇賓客，應對諸侯。王甚任之。上官大夫與之同列，爭寵而心害其能。懷王使屈原造為憲令，屈平屬草稟未定。上官大夫見而欲奪之，屈平不與，因讒之曰，王使屈平為令，衆莫不知，每一令出，平伐其功，以為非我莫能為也。王怒而疏屈平。屈平疾王聽之不聰也，讒諂之蔽明也，邪曲之害公也，方正之不容也，故憂愁幽思而作離騷。離騷者，猶離憂也。（漢・司馬遷撰『史記』卷八十四，屈原賈生列傳第二十四）

【作例】

「屈原」（明・天然撰『歷代古人像讚』、弘治二年〔1498〕刊本）
 「楚屈原像」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物四卷、萬曆三十七年〔1609〕刊本）
 「三閭大夫卜居漁父」（清・蕭雲從『離騷圖』、弘光一年〔1645〕序、順治二年〔1645〕序刊本）
 「屈子」（『芥子園畫傳』第四集・人物、嘉慶二三年〔1818〕初刊本、光緒二十一年〔1895〕石印本）
 「屈子」（橘有税『繪本故事談』卷四、正徳四年〔1714〕刊本）
 「屈原」（屈原と漁父）（馬場信意『分類畫本良材』卷三、正徳五年〔1715〕刊本）
 「屈子」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年〔1803〕刊本）

くつげんたくはん、ぎよふこうひん
 屈原澤畔、漁父江濱

屈原は、楚懷王に左遷され、すっかり憔悴になり、毎日川辺で詩を吟唱する。そこで漁師に出会い、会話を交わされた。

【出典】

史記、屈原名平、楚之同姓、為懷王左徒。博聞彊志，明於治亂，嫻於辭令。王甚任之。上官大夫與之同列，爭寵而心害其能。因讒之。王怒而疏平。後秦昭王欲與懷王會。平曰、秦虎狼之國。不如無行。懷王稚子子蘭勸王行。王死於秦，長子頃襄王立，以子蘭為令尹。子蘭使上官大夫短原於王。王怒而遷之。原至江濱，被髮行吟澤畔。顏色憔悴，形容枯槁。（唐・李瀚撰、宋子光注『蒙求集注』卷下）

【作例】

「屈原澤畔、漁父江濱」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷七、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

くつていじゅし 俱胝豎指

「俱胝豎指」は禪宗の公案の一つである。

【出典】

婺州金華山俱胝和尚、初住庵時、有尼名實際來、戴笠子執錫遶師三匝、曰、道得即下笠子。如是三問、師皆無對、尼便去。師曰、日勢稍晚、何不且住。尼曰、道得即住。師又無對。尼去後、師歎曰、我雖處丈夫之形、而無丈夫之氣。不如棄庵、往諸方參尋知識去。其夜山神告曰、不須離此、將有肉身菩薩來為和尚說法也。逾旬、果天龍和尚到庵、師乃迎禮、具陳前事。龍豎一指示之、師當下大悟。自此凡有學者參問、師唯舉一指、無別提唱。（宋・普濟撰『五燈會元』卷四、高安大愚禪師法嗣）

【作例】

「俱胝豎指」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻五、貞享四年 [1687] 刊本、文政一年 [1818] 再刊本)

「俱胝豎指」(某岡之繪『繪圖の林』巻下、元禄二年 [1689] 刊本)

↓「金華一指禪」

くろくろく 鳩尼羅國

鳩尼羅國は佛牙石の産地である。

【出典】

鳩尼羅國、此乃西番出佛牙石去處。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷)

【作例】

「鳩尼羅國」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷、萬歴三七年 [1609] 刊本)

「鳩尼羅國」(橘有税畫圖『唐土訓蒙圖會』巻四、享保四年 [1719] 刊本)

ぐびじん 虞美人

虞美人は項羽の妃である。項羽軍が垓下で漢の軍隊に包囲された。

夜になると、四面の漢の軍隊に項羽の故郷楚の歌声が聞こえ、項羽は大変驚いた。彼は起きて酒を飲みながら、悲歌を歌った。虞美人がその歌に合わせて踊った。最後に自殺した。伝えることによると、虞美人が自殺した後、雅州の名山県に葬られた。墓の中から草が生えて、鶏冠花に似通っており、葉っぱと葉っぱはそれぞれ相応している。虞美人の曲を歌えば、そのリズムに合わせて踊るといふ。故に虞美人草と呼ばれるといふ。

【出典】

項王軍壁垓下、兵少食盡、漢軍及諸侯兵圍之數重。夜聞漢軍四面皆楚歌、項王乃大驚、曰、漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。項王則夜起、飲帳中。有美人名虞、常幸從。駿馬名騅、常騎之。於是項王乃悲歌忼慨、自爲詩曰、力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅不逝。騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何。歌數闋、美人和之。項王泣數行下、左右皆泣、莫能仰視。(漢・司馬遷撰『史記』巻七、項羽本紀第七)

虞美人草。虞美人自刎、葬於雅州名山縣。冢中出草、狀如雞冠花、葉葉相對、唱虞美人曲、則應板而舞、俗稱虞美人草。(明・張岱撰『夜航船』巻十六)

【作例】

「虞美人」(明・汪氏撰、明・仇英實甫補圖『列女傳』巻四、乾隆四四年 [1779] 序、嘉慶一年 [1796] 跋、萬曆年間 [1573 ~ 1620] 刊本)

「虞姬」(清・上官周繪『晚笑堂畫傳』、乾隆八年 [1743] 刊本)

「虞姬」(呉友如畫寶) 第一集上・古今人物圖、中国古畫譜集成第一二二一巻、山東美術出版社、2009年)

くふじん 瞿夫人

瞿夫人は豫章(江西省南昌)の人である。隋の末、兄は辰州の刺史であった。黄元仙という人が豫章から来た。刺史は彼の徳行を高く評し、妹を嫁がせた。後に黄元仙を自分の後任として推薦した。隋が滅ばされてから、黄元仙は官職を辞めて夫人と一緒に辰州の西の羅山に隱居の生活を送っていた。生活が大変苦しくて、人に雇われて姑を養っていた。こうした生活が十年間続いた。ある日、瞿夫人は突然元仙に「昨日天の帝から命令が来た。あなたと別れなければならない。」と言い終わって、青気に化けて飛んで行ったといふ。

【出典】

瞿夫人，豫章人。隋末，兄爲辰州刺史。有黃元仙者，自豫章來。刺史素高其行，以夫人妻之，復薦其才德以自代。隋亡，乃棄官與夫人隱于州西之羅山。貧甚，爲人傭織以養其姑。如此者十年。一日忽謂元仙曰，昨有帝命，當與君別矣。俄化爲青氣數丈，騰空而去。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷五）

【作例】

「瞿夫人」（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷五、萬曆二八年〔1603〕刊本）

くまひとをすくう熊救人

東晋の昇平（357～367）の頃、ある人が山に入って鹿の猟をした。突然一つの穴に落ちた。穴が大変深い。中には数頭の小熊がいた。しばらくして母親の熊が戻ってきた。熊がじつと彼を見つめ、彼が怖くても少しも動けなかった。その後母親の熊が果物を出し、子供たちに分けた。彼にも同様に配った。彼はお腹が空いたので、死の覚悟で取って食べた。段々互いに慣れてきた。母親は毎朝出かけて果物を探して持って帰る。いつも彼にも配った。後に、子供たちが段々大きくなり、母親は子供たちを順番に背負って穴を出て行った。彼だけは残り、絶望の中に母親は戻ってきた。すると、彼は母親の足を抱いて、出て行った。まさに奇跡の生還であった。

【出典】

晉昇平中，有人入山射鹿，忽墮一坎，窟然深絕，內有數頭熊子。須臾，有一大熊來，瞪視此人。人謂必以害己。良久，出藏果，分與諸子。未後作一分，置此人前。此人饑甚，於是冒死取啖之。既而轉相狎習。熊母每旦出，覓果實還，輒分此人，賴以延命。熊子後大，其母一一負之而出。子既盡，人分死坎中，窮無出路。熊母尋復還入，

坐人邊。人解其意，便抱熊足，於是躍出。竟得無他。（晉・陶潛撰『搜神後記』卷九）

【作例】

「熊救人」（橘有税『繪本故事談』卷一、正徳四年〔1688〕刊本）

くも 蜘蛛

蜘蛛は屋根の隅に網を張り、自分が中にいる。飛んでいる虫が網に当たると、蜘蛛は虫が逃げられないように足で網を繰り返し踏み、振動させる。陶弘景によると、蜘蛛の種類は数十種あるという。『爾雅』には七八種が紹介されている。小さな土蜘蛛は「蠪蛸」といい、長足の蜘蛛は「喜子」という。「喜子」というのは人の衣服に付いたら、親友や客が来るからとのことである。

【出典】

蜘蛛布網於簷四隅，狀如罽，自處其中。飛蟲觸網者，輒以足頓網使不得解。陶弘景云，蜘蛛類數十種。爾雅載七八種。今草蜘蛛有五色，長脚者，作網畢，以大絲向四隅各絡數十折。或云，以厭勝諸蟲。又云，有土蜘蛛，其小者名蠪蛸。長脚者俗呼爲喜子。荊州河內人謂之喜母，此蟲來著人衣，當有親客至。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸六卷）

【作例】

「蜘蛛」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸六卷、萬曆三十七年〔1609〕刊本）

「蜘蛛」（『職巧雛型錦袋畫叢』）

「蜘蛛」（滝澤清畫『潛龍畫譜』草花虫之部、明治一四年〔1881〕刊本）

くもいん 蜘蛛隠

【作例】

「蜘蛛隠」〔龔舎〕（普齋岡子雉著述「大岡普齋」、橋辨次守国「橋辨次」圖畫『畫典通考』巻六、享保十二年〔1727〕刊本）

くもりゅうおおいにしかそんをさわがす

九紋龍大鬧史家村

少華山の盜賊である跳澗虎陳達が華陰県に食糧を略奪しに行くために、史家莊を経由しなければならぬ。そのため、陳達が九紋龍史進に懇願した。しかし、史進がそれを許さない。そこで、二人が戦いを展開した。結局、陳達が史進につかまえられた。

【出典】

且說史進正在莊内整治刀馬，只見莊客報知此事。史進聽得，就莊上敲起梆子來。那莊前莊後，莊東莊西，三四百家史家莊戶，聽得梆子響，都拖鎗拽棒，聚起三四百人，一齊都到史家莊上。看了史進頭戴一字巾，身披朱紅甲，上穿青錦襖，下著抹綠靴，腰繫皮搭（「月」字邊）膊，前後鐵掩心，一張弓，一壺箭，手裏拿一把三尖兩刃四竅八環刀。莊客牽過那疋火炭赤馬，史進上了馬，綽了刀，前面擺著三四十壯健的莊客，後面列著八九十村蠢的鄉夫，各史家莊戶，都跟在後頭，一齊吶喊，直到村北路口擺開。〔中略〕那少華山陳達，引了人馬，飛達到山坡下，便將小嘍囉擺開。史進看時，見陳達頭戴紅凹面巾，身披裏金生鐵甲，上穿一領紅衲襖，腳穿一對吊墩靴，腰繫七尺攢線搭膊，坐騎一疋高頭白馬，手中橫著丈八點鋼矛。小嘍囉兩勢下吶喊。二員將就馬上相見。陳達在馬上看著史進，欠身施禮。史進喝道，汝等殺人放火，打家劫舍，犯著迷天大罪，都是該死的人。你也須有耳朵。好大膽。直來太歲頭上動土。陳達在馬上答道，俺山

寨裏欠些糧食，欲往華陰縣借糧。經由貴莊，假一條路，並不敢動一根草。可放我們過去，回來自當拜謝。史進道，胡說。俺家見當里正，正要來拿你這夥賊。今日到來，經由我村中過，卻不挈你，倒放你過去，本縣知道，須連累於我。陳達道，四海之內，皆兄弟也。相煩借一條路。史進道，甚麼閒話。我便肯時，有一箇不肯。你問得他肯，便去。陳達問，好漢教我問誰。史進道，你問得我手裏這口刀肯，便放你去。陳達大怒道，趕人不要趕上，休得要逞精神。史進也怒掄手中刀，驟坐下馬，來戰陳達。陳達也拍馬挺鎗來迎史進。〔中略〕史進、陳達兩箇鬪了多時，只見戰馬咆哮踢起，手中軍器，鎗刀來往，各防禦隔遮攔。兩箇鬪到問深裏，史進賣箇破綻，讓陳達把鎗望心窩裏擱來，史進卻把腰一閃，陳達和鎗擱入懷裏來。史進輕舒猿臂，欵扭狼腰，只一挾，把陳達輕輕摘離了嵌花鞍，欵欵揪住了線搭膊，丟在馬前受降。那疋戰馬撥風也似去了。史進教莊客將陳達綁縛了。衆人把小嘍囉一趕，都走了。史進回到莊上，將陳達綁在庭心內柱子上，等待一發拏了那兩箇賊首，一併解官請賞。且把酒來賞了衆人，教且權散。（百二十回本『水滸傳』第二回）

【作例】

「九紋龍大鬧史家村」（百回本『李卓吾先生批評忠義水滸傳』第二回、萬曆三八年〔1610〕容與堂刊本）

くり 栗

栗は植えることができるが、移すことができない。その木の高さは二、三丈ある。九月に実が熟れる。大きいものは「板栗」といい、小さいものは「山栗」という。山栗の丸くて尖っていないものは「錐栗」といい、小さくてどんぐりのようなものは「荳栗」といい、指先程小さいものは「茅栗」という。炒めて食すことができる。

【出典】

「時珍曰」栗但可種成，不可移栽。按事類合璧云，栗木高二三丈，苞生，多刺如蝟毛。每枝不下四五個，苞有青黃赤三色，中子或單或雙，或三或四，其殼生黃熟紫，殼內有膜裹仁。九月霜降乃熟，其苞自裂而子墜者，乃可久藏。苞未裂者，易腐也。其花作條，大如筋頭，長四五寸，可以點燈。栗之大者，為板栗，中心扁，子為栗楔。稍小者為山栗。山栗之圓而未尖者為錐栗。圓小如橡子者為莘栗。小如指頂者為茅栗。即爾雅所謂栭栗也。一名栭栗，可炒食之。「以下省略」

【作例】

「栗」（明・李時珍撰『本草綱目』圖卷中、光緒二十一年〔1895〕張紹棠重校本）

「栗」（玉翠齋藤原義包圖『畫圖撰要』、明和三年〔1766〕刊本）

くりこう 九鯉湖

九鯉湖は興化府（福建省莆田市）の仙遊県（福建省仙遊県）にある。伝えることによると、漢の頃、何氏の九人の兄弟が湧飛泉の水を飲み、それぞれ鯉に乗り空に昇ったという。

【出典】

九鯉湖在興化府仙遊縣，自興化府八十里始至九仙官山，自永福縣嶠岫起伏而來，至此聳為一峯。石上湧飛泉，泉水曰味甘。世傳漢世有何氏兄弟九人飲此泉，因各乘一鯉上昇，故名。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理十一卷）

【作例】

「九鯉湖」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理一一卷、萬曆三十七年〔1609〕刊本）

「九鯉湖」（橋有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷二、享保四年〔1719〕刊本）

くるみ 胡桃

胡桃はまた「核桃」ともいう。その木が大きく、木の葉っぱが厚い。花が咲いて、穂になる。実が梨ぐらい大きい。熟れると、外の皮を取り、中の核はすなわち胡桃である。

【出典】

胡桃一名核桃。其樹大株，葉厚而多陰，開花成穗。花色蒼黃，結實，外有青皮包之狀，似梨大。熟時漚去青皮，取其核，是為胡桃。味甘平無毒，食之令人肥健。潤肌黑髮，去五痔。多食利小便，能脫人眉。其樹皮止水痢。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十一卷）

【作例】

「胡桃」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十一卷、萬曆三十七年〔1609〕刊本）

「胡桃」（明・李時珍撰『本草綱目』圖卷中、光緒二十一年〔1895〕張紹棠重校本）

「胡桃」（中村惕齋『訓蒙圖會』卷十八、寛文六年〔1666〕刊本）

くろぼたん 黒牡丹

晩唐の頃、都で春にピクニックして牡丹を觀賞するのが流行っていた。そこで、劉訓という金持ちが客を招いて牡丹を觀賞する。客が訓の屋敷の大門に着いたら、そこに水牛数百頭が繋がっている。皆が笑いながら、水牛を指して「これは劉さんの黒牡丹だ。」と言った。

【出典】

唐末劉訓者，京師富人。梁氏開國，嘗假貸以給軍。京師春遊，以觀牡丹為勝賞。訓邀客賞花，乃繫水牛數百在前，指曰，此劉氏黒牡丹也。（宋・祝穆撰『古今事文類聚』後集卷三十九）

【作例】

↓「牡丹に牛に老人」、「牡丹花に老人」

くんおういろをこのみたまひてとくをこのみたまはずと
とうばじゅつかひのころをえがく 君王色を好み給ひ
て徳を好み給はずと東坡述懐の意を畫

宋の蘇東坡（子瞻）の「赤壁賦」を図解する挿絵である。全部で五枚あり、これは「其二」である。

【出典】

清風徐來、水波不興。舉酒屬客，誦明月之詩，歌窈窕之章。少焉月出於東山之上，徘徊於斗牛之間。白露橫江，水光接天。縱一葦之所如，凌萬頃之茫然。浩浩乎如馮虛御風，而不知其所止，飄飄乎如遺世獨立，羽化而登仙。於是飲酒樂甚。扣舷而歌之。歌曰，桂棹兮蘭槳。擊空明兮泝流光。渺渺兮予懷，望美人兮天一方。（蘇子瞻「赤壁賦」、『古文眞寶後集』卷一）

【作例】

「君王色を好み給ひて、徳を好み給はずと、東坡述懐の意を畫」「其二」（有臺藤應著、旭輝齋畫『畫本古文眞寶後集』初編卷三、嘉永三年 [1850] 刊本）

↓「蘇東坡、両三客とともに船を浮べて赤壁に遊ぶの圖」「其一」、「主客謾遊、興酣乃圖」「其三」、「文中所謂魏の曹操、呉の國を攻討んとて、軍兵を卒して鄂州の赤壁に兵船を浮かべたる時、興に乗じ槳を横たえて詩を賦すの圖」「其四」、「船遊興酣にして主客亂酔乃圖」「其五」

ぐんこうそうぎぼう 郡功曹魏滂

郡功曹魏滂は蘭亭四十二人（四十三人）の一人である。

【出典】

↓「蘭亭四十二賢圖」、「蘭亭四十三賢圖」

【作例】

「郡功曹魏滂」（文鳳山人「文鳳駿聲」『文鳳畫譜』三編、文化八年 [1811] 刊本）

ぐんごかんしゃやく 郡五官謝繹

郡五官謝繹は蘭亭四十二人（四十三人）の一人である。

【出典】

↓「蘭亭四十二賢圖」、「蘭亭四十三賢圖」

【作例】

「郡五官謝繹」（文鳳山人「文鳳駿聲」『文鳳畫譜』三編、文化八年 [1811] 刊本）

くんざん 君山

君山は、「洞庭山」ともいい、「湘山」ともいい、洞庭湖にある。『山海経』によると、堯帝の娘である湘君がそこに住んでいたため、故に「君山」と名付けた。

【出典】

君山在府城西一十五里洞庭湖中，一名洞庭山，又名湘山。狀如十二螺髻。『山海経云，洞庭之山，帝之二女居之，蓋堯女湘君始居於此，故云。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理十卷）

【作例】

「洞庭君山圖」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理十卷）
「君山」（普斎岡子雉著述「大岡普斎」、橋辨次守国「橋辨次」圖畫『畫典通考』卷四、享保一二年 [1727] 刊本）

くんしこく 君子国

君子国は奢比の北にある。一説は肝榆の北にある。その人は服を着、冠をかぶる。獸を食す。常に二匹の虎をそばに置く。人々が互いに譲り合い、争わないという。

【出典】

君子国在其「奢比」北、衣冠帶劍、食獸、使二大虎在旁、其人好讓不爭。有薰華草、朝生夕死。一曰在肝榆之北。（晉・郭璞注『山海經』卷九、海外東經）

君子国在奢比之北、其人衣冠、帶劍、食獸。有二大虎常在其旁、其人好讓不爭、故使虎豹亦知其廉讓。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷）

【作例】

「君子国」〔明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本〕

「君子国」〔橋有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷四、享保四年 [1719] 刊本〕

くんしょう 君章

郅惲、郅字は君章といい、汝南西平（河南省西平）の人である。『韓詩』『嚴氏春秋』に精通する。王莽の頃、政權を漢に帰すよう諫めたため、死罪になり、後に恩赦され、蒼梧に逃げた。洛陽上東城門侯であった頃、光武帝が狩獵して夜遅く帰ったが、郅惲は城門を開けるのを拒んだため、参封尉に左遷された。後に皇太子に『韓詩』を講読したことがあるが、病気で亡くなった。

【出典】

郅惲、字君章、汝南西平人也。年十二失母、居喪過禮。及長、理

韓詩、嚴氏春秋、明天文歷數。「中略」惲遂客居江夏教授、郡舉孝廉、爲上東城門侯。帝嘗出獵、車駕夜還、惲拒關不開。帝令從者見面於

門間。惲曰、火明遠遠。遂不受詔。帝乃迴從東中門入。明日、惲上書諫曰、昔文王不敢槃於游田、以萬人惟憂。而陛下遠獵山林、夜以繼晷、其如社稷宗廟何。暴虎馮河、未至之戒。誠小臣所竊憂也。書奏、賜布百匹、貶東中門侯爲参封尉。「中略」後令惲授皇太子韓詩、待講殿中。（南朝宋・范曄撰『後漢書』卷二十九、申屠剛鮑永郅惲列傳第十九）

【作例】

「君章」〔馬場信意『分類畫本良材』卷二、正徳五年 [1715] 刊本〕

ぐんもうひょうほう 群盲評方

【作例】

「群盲評方」〔群瞽』（『點石齋叢畫』、光緒十一年 [1885] 序、上海點石齋書局石印本）

「群盲評方」〔群瞽』（老蓮先生著『畫圖醉芙蓉』中卷、享和三年 [1803] 序、文化六年 [1809] 叙刊本）

けい 鶏

けい 鶏

鶏はいろんな種類があり、産地によって体の大きさも違う。越の鶏は小さい。蜀の鶏は大きい。魯の鶏はもっと大きい。鶏は時刻をよく知り、餌を見つけると仲間を呼びよせる美徳がある。

【出典】

鶏有蜀、魯、荆、越諸種。越鶏小、蜀鶏大、魯鶏又其大者。舊說日中有鶏。鶏、西方之物。大明生於東、故鶏入之湯日、巽爲鶏、兌見而巽伏。故爲鶏。鶏知時而善伏、故也。鶏好邪視、故王褒云、魚瞰鶏睨。吳均曰、鶏有吁羣之德、故見食則相告。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一卷)

【作例】

【鶏】(明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一卷、萬曆三十七年〔1609〕刊本)

【鶏】(繪本初心柱立)一、正徳五年〔1715〕刊本)

【無題】【鶏】(法眼春卜雪静編『畫巧潜覧』卷一、元文五年〔1740〕刊本)

【鶏】(橘守国畫圖『運筆麓畫』卷上、寛延一年〔1748〕序、弘化一年〔1844〕刊本)

【鶏】(雲谷等益筆)(法眼春卜一翁『和漢名畫苑』三卷、寛延二年〔1749〕序刊本)

【鶏】(俵屋宗達筆)(法眼春卜一翁『和漢名畫苑』六卷、寛延二年〔1749〕序刊本)

【鶏】(英一蝶『群蝶畫英』中、明和六年〔1769〕題言、安永七年〔1778〕刊本)

【鶏】(英一蝶『群蝶畫英』下、明和六年〔1769〕題言、安永七年〔1778〕刊本)

【無題】【鶏】(蕙斎北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年〔1794〕刊本)

【無題】【鶏】(蕙斎北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年〔1794〕刊本)

【鶏】(老蓮先生著『畫圖醉芙蓉』中卷、享和三年〔1803〕序、文化六年〔1809〕叙刊本)

【鶏】(尾形光琳『光琳百圖』上、文化十二年〔1815〕跋刊本)

【無題】【鶏】(揺月素眞畫『素眞畫譜』初編、安政五年〔1858〕序刊本)

【鶏】(葛飾爲斎繪『萬物圖解爲斎書式』二帙、元治一年〔1864〕序刊本)

【鶏】(後素畫譜)天保三年?〔壬辰閏月〕刊本)

【鶏】(『初心畫鑑』、昭和三年〔1928〕刊本)

【鶏】(淡斎義信筆『淡斎浮世畫譜』)

【鶏】(草筆骨法麗畫苑)卷下)

【無題】【鶏】(木風翁文紹編『古今名家畫苑』初編)

げいっりん 倪雲林

倪雲林は倪瓚(1301～1374)の号で、字は元鎮といい、無錫(江蘇省無錫)の人である。倪雲林は詩や書画が得意であり、四方の名士たちが皆憧れて、訪ねてくる。住んでいる閣楼は「清閨」という。中には静かで世俗の世界と隔たられている。蔵書は数千巻あり、どれも自ら校勘したものばかりである。古い鼎、書道、名琴、奇画が両側に陳列されている。外には四季の花や木が繁々として家を囲んでいる。故に自ら「雲林居士」を号とした。時には客と家の中で酒を飲みながら、詩を唱和する。雲林は潔癖がある。盥をいつも持っている。俗の客が帰ってから、必ずその人の居た場所を拭く。雲林に書画を求めて人が次々と来るが、時には雲林もそれに応じる。元の順帝の至正(1341～1367)の始め頃、世の中に平和そのものであった。ある日、雲林は突然親戚や友人に散財した。皆不思議に思った。しばらくすると、反乱が起きた。金持ちの家が皆やられ、雲林だけが小舟に乗って漁師のように笠を被って震澤と三泖の間に行き来したため、難を逃れた。反乱の首領である張士誠が雲林を捕らえたいが、結局、雲林は小舟で移動しているため、捕らえなかった。また弟張士信が金を持って書画

を乞おうとしたが、きっぱりと断られた。士信は大変腹が立った。ある日、士信が友人と一緒に湖を遊覧したところ、葦の叢から特別な香りが漂ってきた。そこが雲林の居場所だと疑い、探してみたら、やっぱり雲林であった。反乱が治まった後、雲林も年寄りになり、平民の服を着て、庶民の中に紛れていた。明の太祖の洪武七年（1374）、雲林が亡くなり、七十四歳であった。

【出典】

倪瓚、字元鎮、無錫人也。家雄於貲、工詩、善書畫、四方名士日至其門。所居有閣曰、清閨、幽迥絕塵、藏書數千卷、皆手自勘定。古鼎、法書、名琴、奇畫陳列左右、四時卉木縈繞其外、高木修篁、蔚然深秀、故自號雲林居士。時與客觴詠其中、爲人有潔癖、盥濯不離手、俗客造廬、比去、必洗滌其處。求隸素者踵至、瓚亦時應之。至正初、海內無事、忽散其貲給親故、人咸怪之。未幾兵興、富家悉被禍、而瓚扁舟簞笠往來震澤、三泖間。獨不罹患。張士誠累欲鈎致之、逃漁舟以免。其弟子信以幣乞畫、瓚又叱去。士信患、他日從賓客遊湖上、聞異香出葦葦間、疑爲瓚也、物色漁舟中、果得之。扶幾斃、終無一言。及吳平、瓚年老矣、黃冠野服、混跡編氓。洪武七年卒、年七十四。（清・張廷玉等撰『明史』卷二百九十八）

【作例】

「倪高士像」〔倪瓚〕（清・顧沅輯、孔繼堯繪『吳郡名賢圖傳』卷二、道光七年〔1827〕序刻本）

けいか 荊軻

荊軻（?～前227）は衛の人である。先祖は斉の人だったが、衛に移って慶卿と呼ばれ、後に燕に移ったら荊軻と呼ばれた。荊軻は読書や剣術が好きで、術を以て衛の元君を説いた。衛の元君は彼を起用しなかった。荊軻が燕に移って、屠殺業者や築を演奏する高漸離が好き

であった。荊軻は酒が好きで、毎日屠殺業者と高漸離と一緒に市場で酒を飲み、酔っ払うと、高漸離が築を演奏し、荊軻がそれに合わせて歌う。皆は大変楽しかった後、大泣きし、傍若無人であった。荊軻は酒の仲間に入っているが、人と付き合うのは穏やかで、書物が好きであった。彼は諸侯を遊説した際、賢人や豪傑ばかり付き合った。燕に移って田光先生も彼の面倒をよく見た。なぜならば彼が平凡な人ではないのが分かっているからである。

【出典】

荊軻者、衛人也。其先乃齊人、徙於衛、衛人謂之慶卿。而之燕、燕人謂之荊軻。荊卿好讀書擊劍、以術說衛元君、衛元君不用。其後秦伐魏、置東郡、徙衛元君之支屬於野王。「中略」荊軻既至燕、愛燕之狗屠及善擊筑者高漸離。荊軻嗜酒、日與狗屠及高漸離飲於燕市、酒酣以往、高漸離擊筑、荊軻和而歌於市中、相樂也、已而相泣、旁若無人者。荊軻雖游於酒人乎、然其爲人沈深好書、其所遊諸侯、盡與其賢豪長者相結。其之燕、燕之處士田光先生亦善待之、知其非庸人也。（漢・司馬遷撰『史記』卷八十六、刺客列傳第二十六）

【作例】

「荊軻刺秦王」〔元刊本『全相秦並六国平話』卷中、元至治年間〔1321～1323〕刊本〕

けいかさんしよくのず 桂花三色圖

桂花三色とは、赤いのが状元（科挙の第一位）、黄色いのが榜眼（科挙の第二位）、白いのが探花（科挙の第三位）である。

【出典】

桂花三色 紅爲状元、黃爲榜眼、白爲探花郎。（明・張九韶撰『羣書拾唾』卷十）

【作例】

「桂花三色」(大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』天、文化六年 [1809] 序刊本)

げいかん 倪寛

倪寛は千乘(山東省広饒)の人である。『尚書』を勉強するために、歐陽生に師事した。後に郡から推薦され、孔安国に師事した。貧しくて金がないため、時々経書を持って農作業をする。休憩すると読書する。そのことが伝えられている。

【出典】

倪寛、千乘人也。治尚書、事歐陽生。以郡國選詣博士，受業孔安國。貧無資用，嘗爲弟子都養。時行貨作，帶經而鉏，休息輒讀誦，其精如此。(漢・班固撰『漢書』卷五十八，公孫弘卜式兒寛傳第二十八)

【作例】

「帯經而鋤」(元・虞韶編『新刊大字分類校正日記故事大全』卷一、嘉靖二十一年 [1542] 序刊本)

「倪寛」(和刻本『圖像合璧君臣故事句解』卷二、寛文二十二年 [1672] 跋、延寶二年 [1674] 刊本)

「倪寛」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷四、貞享四年 [1687] 刊本、文政一年 [1818] 再刊本)

「倪寛」(橘宗兵衛「有税」繪『繪本通寶志』卷五上、享保一四年 [1729] 刊本)

けいくんれきか 薊訓歴家

仙人薊訓は薊子訓のことである。伝えることによると、彼は齊の人である。

【出典】

神仙傳、薊子訓齊人。舉孝廉，除郎中，又爲都尉。人莫知其有道。在鄉里常以信讓與人。三百餘年顔色不老。曾求抱鄰舍嬰兒，誤墮地死。兒家素尊子訓。即埋之。二十餘日，子訓自外來，抱兒還之。家恐是鬼。子訓既去，掘視所埋，但泥而已。又諸老人髮白者，子訓與對坐，共語宿昔，皆還黑。京師貴人莫不虚心欲見，爭請子訓。比居大學諸生爲請子訓。子訓曰，吾某月日當往。到期，子訓以食時發，日中到。未半日，行千餘里。乃見書生問，誰欲見我。卿盡語之。吾日中當往。到日中，子訓果往二十三處。諸貴人喜，自謂先詣之。明日相參問，各言子訓衣服顔色如一。而所論說，隨主人所諮不同。遠近驚異。子訓去，乘青驪，出東門陌上，徐徐行。諸貴人走馬逐不能及。行半日而相去常一里許。乃止。(唐・李瀚撰、宋・徐子光注『蒙求集注』卷下)

【作例】

「薊訓歴家」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷八、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行)

けいこう 嵇康

嵇康(223 ~ 262)、字は叔夜といい、譙国(安徽省亳州)の人である。先祖は奚という姓であり、会稽上虞の人である。人の恨みを避けるために、銓に遷った。銓に嵇山があり、嵇康の家はその山のそばにあるため、姓を嵇としたのである。嵇康は身長七尺八寸であり、がっちりした体格であった。詩文が得意で、風格がある。飾りがない。性格は静かで欲がない。心が広い。読書が好きで、老荘を好む。魏の皇室と姻戚関係があるため、中散大夫に拜せられる。常に養生したり、丹薬を服用したり、琴を弾いたり、志を詠んだりする。陳留の阮籍、河内の山濤、河内の向秀、沛国の劉伶、阮籍の姪である阮咸、瑯邪の

王戎とよく竹林に遊びに行く。故に「竹林七賢」と呼ばれるようになった。

嵇康が処刑される前に、太学生三千人が嘆願したが、帝はそれを許しなかった。処刑に臨む際、嵇康は琴を依頼し、「広陵散」を一曲弾いた。そして嵇康が弾き終わると、溜息をした。「昔袁孝尼が私に習いたかったが、いつも断った。いま、『広陵散』は絶唱になるのだ。」と。年は四十歳であった。皆が悲しかった。後に帝も後悔したという。

【出典】

嵇康字叔夜、譙國銍人也。其先姓奚，會稽上虞人。以避怨，徙焉。銍有嵇山，家于其側，因而命氏。兄喜，有當世才，歷太僕、宗正。康早孤，有奇才，遠邁不羣。身長七尺八寸，美詞氣，有風儀，而土木形骸，不自藻飾，人以爲龍章鳳姿，天質自然。恬靜寡欲，含垢匿瑕，寬簡有大量。學不師受，博覽無不該通，長好老莊。與魏宗室婚，拜中散大夫。常修養生服食之事，彈琴詠詩，自足於懷。以爲神仙稟之自然，非積學所得，至於導養得理，則安期、彭祖之倫可及，乃著《養生論》。〔中略〕所與神交者惟陳留阮籍、河內山濤、豫其流者河內向秀、沛國劉伶、籍兄子咸、瑯邪王戎，遂爲竹林之游，世所謂竹林七賢也。戎自言與康居山陽二十年，未嘗見其喜愠之色。康嘗採藥游山澤，會其得意，忽焉忘反。時有樵蘇者遇之，咸謂爲神。〔中略〕帝既昵聽信會，遂并害之。康將刑東市，太學生三千人請以爲師，弗許。康顧視日影，索琴彈之，曰，昔袁孝尼嘗從吾學《廣陵散》，吾每靳固之，《廣陵散》於今絕矣。時年四十。海內之士，莫不痛之。帝尋悟而恨焉。初，康嘗遊於洛西，暮宿華陽亭，引琴而彈。夜分，忽有客詣之，稱是古人，與康共談音律，辭致清辯，因索琴彈之，而爲《廣陵散》，聲調絕倫，遂以授康，仍誓不傳人，亦不言其姓字。（唐・房玄齡等撰『晉書』卷四十九，列傳第十九）

嵇康，字叔夜。譙國銍人。銍有嵇山。家于其側。因氏焉。身長七

尺八寸，土木形骸不加飾厲，龍章鳳姿，天質自然。時王伯通造一館，但有人宿，必死。伯通累見其凶，常閉之。至是康請寄宿館中。乃取琴彈。二更時。有八鬼從館出。康始懼，微誦乾元亨利貞數遍，徐問鬼曰，王伯通造此館，凡有人宿，輒死。無乃若輩殺之耶。鬼曰，我輩非殺人者，乃是舜時掌樂官。兄弟八人，號伶倫。舜受佞臣之言，枉殺我兄弟，葬埋於此。王伯通於吾塚上築牆。吾等苦其壓，見人來宿者出擬告之。彼見吾等，自懼而死，非殺之也。今願先生與伯通言。取吾等骸骨，遷葬他處。期半年，伯通當爲本郡太守。今授先生《廣陵》一曲，聊相酬耳。康大悅，遂以琴與鬼。鬼彈一遍，康即能彈，遂彈至夜深。伯通往館中視康，琴聲甚佳。因問康，康具言其事。明日，伯通使人掘地，果見骸骨。遂別造棺，就高潔處葬之。後晉文帝時，伯通果如期爲太守。康爲中散大夫。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷四）

【作例】

「嵇康」（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷四、萬曆二八年〔1601〕刊本）

「晋中散大夫嵇公康」（清・王齡撰、任熊繪『於越先賢像傳讚』卷上、咸豐六年〔1856〕刊本）

「嵇康」（『任渭長畫傳四種』於越先賢傳、中国古畫譜集成第四卷、山東美術出版社、2000年）

「嵇康」（橘有税『繪本故事談』卷三、正徳四年〔1714〕刊本）

「嵇康」（大岡春卜『和漢故事卜翁新畫』卷四、寛延四年〔寶曆一、1751〕序、寶曆三年〔1753〕刊本）

けいこう 荊公

↓王安石

けいこうどくしよ 螢光読書

↓「車胤聚螢」

けいこうろばこのる 荊公騎驢

王荊公は北宋の宰相である王安石のことである。荊公は晩年に『字説』という著書に心血を注いだ。彼について『字説』を学ぶ人が多かった。金華の兪紫琳清老はいつも『字説』を携えて、荊公が乗っている驢馬の後に追っかけていたという。

【出典】

荊公晩年刪定字説、出入百家、語簡而意深。常自以爲平生精力盡於此書。好學者從之請問，口講手畫。終席，或至千餘字。金華兪紫琳清老嘗冠秃巾，衣掃塔服，抱字説，追逐荊公之驢，往來法雲定林，過八功德水，逍遙游亭之上，龍眠李伯時曰，此勝事不可以無傳也。（黃庭堅撰『山谷集』卷二十七，書荊公騎驢圖）

げいさん 倪瓚

↓「倪雲林」

げいしやううい 霓裳羽衣

開元二十八年（740）十月、玄宗帝が温泉宮に行き、高力士を派遣して楊氏の娘玉環を壽王（玄宗帝の息子）の妃とした。後に玄宗帝が玉環を女道士に変身させ、号は太真といい、太真宮に出家させた。天寶四年（755）七月、玄宗帝は左衛中郎將韋昭訓の娘を壽王の妃にし、太真宮の玉環を自分の妃にした。謁見した際、『霓裳羽衣曲』を演奏させた。『霓裳羽衣曲』は玄宗帝が三郷駅に登った際、作ったという。一説では、天寶の初めに、羅公遠が玄宗帝に仕え、八月十五日の夜、

宮中で月を觀賞する。羅公遠は「陛下は臣下について月に遊びに行くか。」と尋ねた。そこで桂の木の枝を取って、空中に投げると、橋に変わり、その色は銀のようである。玄宗帝を呼んで一緒に登った。数十里歩くと、都に着いた。公遠は「ここは月宮だ」と説明した。数百人の仙女がおり、白い帯をしたゆつとりの服を着ている。広い庭で踊った。玄宗帝は前に行き「これは何の曲か」と訪ねると、『霓裳羽衣』だと答えた。玄宗帝は密かにその楽譜を暗記して、遂に橋に戻り、振り返ってみると、歩いた部分は少しづつ消えた。そして伶官にその声調を真似させ、『霓裳羽衣』を作曲したという。

【出典】

開元中、中秋望夜。時玄宗於宮中翫月，公遠奏曰，陛下莫要至月中看否。乃取拄杖，向空擲之，化爲大橋，其色如銀。請玄宗同登，約行數十里，精光奪目，寒色侵人。遂至大城闕。公遠曰，此月宮也。見仙女數百，皆素練寬衣，舞於廣庭。玄宗問曰，此何曲也。曰，霓裳羽衣也。玄宗密記其聲調，遂回。卻顧其橋，隨步而滅。且召伶官，依其聲調，作霓裳羽衣曲。（宋・李昉等撰『太平廣記』卷二十二）

けいしやうふこ 嵇紹不孤

晋の嵇紹は字が延祖という。彼は竹林七賢の一人嵇康の子息である。康が処刑される前に、「巨源がいるので、お前が孤独にならない」と紹に言った。巨源は山濤のことである。彼も竹林七賢の人である。

【出典】

晉嵇紹字延祖。父康與山濤善。臨誅謂紹曰，巨源在。汝不孤矣。後濤薦爲秘書丞。始入洛，或謂王戎曰，昨於稠人中始見嵇紹，昂昂然若野鶴在雞群。裴頠亦深器之。每日，使延祖爲吏部尚書，可使天下無復遺才。累遷侍中。及惠帝蒙塵，馳詣行在所，王師敗績，百官及侍衛散潰。唯紹儼然端冕，以身捍衛。兵交御輦，飛箭雨集，遂被

害於帝側，血濺御服。帝深哀歎之。及事定，左右欲浣衣。帝曰，此
 穢待中血。勿去。元帝表贈太尉。諡曰忠穆，祠太牢。（唐・李瀚撰、
 宋・徐子光注『蒙求集注』卷下）

【作例】

「嵇紹不孤」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷五、
 享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行）

けいじょう 傾城

↓「李夫人」

けいしくん 薊子訓

薊子訓は不思議な道を得た。都に行つて、王侯貴族は皆彼と親しく
 付き合ひ、常に数百人が彼のところにいる。だれもが彼のために宴会
 を開き、いつも困ることがない。後に隱遁してついに行方不明となつ
 た。はじめて去つた日に、白雲が数十か所に立ち上がった。後に人が
 長安の東霸城で見かけた。ある翁とともに銅人を触りながら、「この
 柱を見てからもうすぐ五百年になる。」と、話し合つた。見た人は「薊
 先生、ちよつと待つて。」と呼んだが、ゆっくり歩いていようように見
 えるが、走る馬もなかなか追いつかない。

【出典】

薊子訓者、不知所由來也。建安中、客在濟陰宛句。今曹州縣、句
 音劬。有神異之道。嘗抱鄰家嬰兒，故失手墮地而死。其父母驚號怨
 痛，不可忍聞。而子訓唯謝以過誤，終無它說，遂埋葬之。後月餘，
 子訓乃抱兒歸焉。父母大恐，曰，死生異路，雖思我兒，乞不用復見
 也。兒識父母，軒渠笑悅，欲往就之。母不覺攬取，乃實兒也。雖大
 喜慶，心猶有疑，乃竊發視死兒，但見衣被，方乃信焉。於是子訓流
 名京師，士大夫皆承風向慕之。後乃駕驢車，與諸生俱詣許下，道過

滎陽，止主人舍，而所駕之驢忽然卒僵，蛆蟲流出，主人遽白之。子
 訓曰，乃爾乎。方安坐飯，食畢，徐出以杖扣之，驢應聲奮起，行步
 如初，即復進道。其追逐觀者，常有千數。即到京師，公卿以下候之
 者，坐上恆數百人。皆爲設酒脯，終日不匱。後因遁去，遂不知所止。
 初去之日，唯見白雲騰起，從旦至暮，如是數十處。時有百歲翁，自
 說童兒時，見子訓賣藥於會稽市，顏色不異於今。後人復於長安東霸
 城見之，與一老翁共摩挲銅人。酈元水經注曰，魏文帝黃初元年，
 徙長安金狄。重不可致，因留霸城南。相謂曰，適見鑄此，已近五百
 歲矣。史記秦始皇二十六年，於咸陽鑄金人十二，各重千斤。至此四
 百二十餘年。顧視見人而去。猶駕昔所乘驢車也。見者呼之曰，薊先
 生小住。並行應之，並猶且也，音蒲朗反。視若遲徐，而走馬不及。
 於是而絕。（南朝宋・范曄『後漢書』卷八十二下，方術列傳第七十
 二下）

薊子訓，得神異之道。既到京師。公卿以下候之者。坐上恆數百人。
 皆爲設酒脯。終日不匱。後遁去。遂不知所之。初去之日。唯見白雲
 騰起數十處。後人於長安東霸城見之。與一老翁共摩挲銅人。相謂曰。
 適見鑄此。而已近五百歲矣。見者呼之曰。薊先生小住。並行相應。
 視若遲徐。而走馬不及。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷二、万
 曆二八年 [1600] 刊本）

【作例】

「薊子訓」（橘有税『繪本故事談』卷六、正徳四年 [1717] 刊本）